

新型コロナウイルス感染症が福祉の技術プロジェクトにもたらしたもの

What COVID-19 brought to Technology for Welfare Project

山田晃嗣、小林孝浩、湯澤大樹

YAMADA Koji, KOBAYASHI Takahiro and YUZAWA Taiki

キーワード オンライン、現場、対話、福祉施設

Keywords online, filed, dialogue, welfare facilities

1. 背景・きっかけ

令和2年度の前期は、新型コロナウイルス感染症対策のため、学校の講義やイベントなどでオンライン化が進んだ。積極的に進んだというよりも、そうしなければ学校運営が進まない状況であったため、当初はやむなく取り入れられた状態であった。本学のプロジェクトも同様に、2020年前期の第一波といわれた時期（主に4～6月）はプロジェクトで各自が進めている活動内容についての進捗確認や話し合い、外部との単純な打ち合わせについてはオンライン会議ツール¹を利用し、プロジェクト活動を継続していた。福祉の技術プロジェクト（以降、プロジェクトと記す）の場合、各自が進めている内容の一部は在宅でも可能であるが、外部と連携していると、オンラインのみで進められる内容とは限らない。

外部と連携している内容の場合、各プロジェクトのメンバー（教員や学生、プロジェクト研究補助員を含む。以降メンバーと記す。）が関係する方との意見や考えなどを把握し、それらを基にしてツールなどの提案をしてきた。例えば学校と連携した場合、先生方の意見や考えなど言葉でのコミュニケーションであればオンラインでも対応可能である。しかし、担当される先生だけではなく、関係する学校関係者の反応も考慮する必要がある。また、授業などで利用する教室や、児童・生徒らの反応なども大事な要素である。先生自身も我々メンバーから指摘されてはじめて気付くこともあったり、内容によっては何回か繰り返すことで見えてくる課題などもある。そうした状況から、オンラインで実施可能な内容もあるが、オンラインだけで完結した活動にするのは難しいと考えていた。

また、新型コロナウイルス感染症の状況下ということから、学校の関係者ではない本学メンバーが学校に頻繁に出入りすることも憚られることから現場へ足繁く通うことが難しい状

況であった。

そうした背景だからこそ、本稿で紹介するオンライン上で定期的に意見交換する場を設けるに至った。きっかけは、令和2年のオープンハウスのイベントにある。プロジェクト初のオンラインのトークイベントを7月23日（木）・24日（金）の2日間の日程で開催した。特にオンラインでの実施という特性を生かして遠方の方や現地でインタビューを行うことが難しい方をゲストとした。

初日のゲストはJICA帯広で活動する古川 浩一氏（2010年IAMAS修了）、二日目は、岐阜県の池田町にある障害福祉サービス事業所「ふれ愛の家」副所長の中村 武文氏を招いて開催した。福祉関係者のみならず、本学のウェブやSNS・口コミなどを通じて興味を持った方々が参加し、幅広い内容で議論したり、意見交換を行った。トーク終盤になっても様々な課題や話題が尽きず、一部の参加者からはそうした内容をいつでも相談したり、気軽に話せる場所が欲しい、という意見があった。このプロジェクトの目的は、課題解決に向けた対応を行うことであり、そうした参加者との思惑が一致したため、イベント後も継続して定期開催する「ワイド福祉の技術プロジェクト（仮）」を発足することとなった。

2. 実施方法

実施は、毎週金曜日の午前中で固定とし、本学での授業やイベントなど特段の理由がない限り同じ時間帯にオンラインで実施することとした。参加者には福祉分野に関わる方が多いため、現場で起こっている不具合や課題などのほか、最近自分自身の身の回りで起こったことについて感じたこと、思っていることなども話をしてもらっている。場合によっては他の人の考えに意見をするなど議論に発展することもある。なお、相談内容についてすぐに解決方法を見出すことが

1 Zoomミーティングを利用



図1 オープンハウスでのトークイベントの様子

できる場合もあるが、見つからないこともあった。その場合は何回かに渡ってその内容について取り上げ、他の話題と組み合わせで検討するなどより良い解決法を見つけるようにした。解決方法をみんなで見つけやすくするために、参加者の中には状況をスマートフォンのカメラを使ってライブ中継して伝えたり、実施内容を資料や映像にまとめて共有するなど、工夫する姿勢も見ることができた。

なお、このオンラインの実施には毎回参加することを必須とはせず、同じ日でも都合のいい時間帯のみ参加するなど途中参加・退出が行える形態としている。また、メンバーはカメラを起動して参加していることも多いが、これも必須ではない。出先からの参加となる場合、カメラオンとすることが難しいこともあるので、音声のみだったり、場合によってはチャットのみによる参加も可とするなどスタイルも自由とすることで、より幅広い参加を呼び掛けた。

3. 場の設計

「オンラインによる集まり」を数回開催したところで、「会のあり方」について考えた。

第一は記録である。本会を催すことにより、我々や取り巻く環境にどんな変化が起きるかをつぶさに残す必要があると考え、プロジェクト研究補助員に依頼し話題を可能な限り書き残すようにした。なお、話題の連続性や、不定期の参加者への便宜として、平時でも記録は残すようにしていたが、この会では、意識してより詳しく残してもらえるように依頼し、参加者なら誰でも記録を閲覧できるように公開した。

第5章では、これを振り返って記述、分析する。

話題が偏ることによる弊害を感じるようになった。例えば、ある参加者に関係しない話題が続くと、参加の意義や意欲が削がれるのではないかと感じられたためである。また、話題・

テーマの大きさや重要性に幅があり、「しっかり検討したい話題」や「単なる気づいた点についての意見(それも問題を発見する大切な話題ではある)」なども、区別されず混在していた。

これらは、現段階で解決に至っていないが、例えば、「ここからは〇〇について、少し集中的に話しましょう」など声がけして、一時的にワークショップ形式へ切替えるなど進行方法を変化させると捉え方が変わるためより深い議論が生まれるかもしれないので今後検討していきたい。また、途中参加の場合でも、話しやすくすることを狙って、話題を一時保留して「最低限の挨拶と、近況を聞く」ように心がけた。これは、「参加してもほとんど話さなかった／話せなかった」というケースもあったが、少しでも参加してもらえるフックとして働くと考えられる。

大きな視点では、誰もがフラットな参加者となれるよう配慮した。つまり、形式的に本学側で進行を行うが、誰もがお客さんではなく、一構成員であることを理想とした。その入り口として「会の命名」であるが、現時点でまだ仮称のままであるので、今後の課題としたい。

より積極的な「参加意義」を持たせる工夫も考えていた。例えば、時事的なネタで「お題」を与え合う、などである。このような工夫により参加者全体で考え、会がより活性化する方向を検討していきたい。

会の開催と並行して、参加者相互に、手軽に連絡が取れる方法を用意した。メーリングリストなどのコミュニケーションツールも考えられたが、本会ではチャットツール²を利用することとした。

これにより、時間外の話題投稿や、簡単なアーカイブとして機能させることができた。同時にリアルタイム性を有するため、会の開催前にリマインドとしても使用した。

4. 内容

ここでは、この会で取り上げたいいくつかの事例を紹介する。

一つ目は、はっきりと発声ができない方との円滑な対話を支援する自動音声認識技術(ASR)の提案である。就労支援施設を利用されている(主に)知的障害を持つ方々には、コミュニケーションを積極的に取ろうとする方もいる。そうした場合、施設を訪問する外部の方々との対話をする機会も多々あるが、発音がはっきりしないなど発声がうまくできないこともあり、発する単語などが聞き取りにくく対話がスムーズに進まないことがある。会って間もないうちは分かるまで聞き返し、対話を成立させようと努力する。これはひょっとすると日本人に特有な傾向かもしれないが、どんな方であったとしてもあまりにも何度も聞き返すことは良くない、失礼なこと

2 Slackを利用

であると思ってしまう、そうした方々だと判断されると対話を避けてしまう傾向にある。障害を持つ方々にとっては対話をする機会を逸ししてしまう、ということが話題になった。特に最近はマスクを付けた状態で対話する必要があるため、さらに発音がはっきりしない傾向にある。そのため本学側からASRなどを利用することを提案し、取り組むことになった。こちらの取り組みは現在も進行中で、対象となる方が発声すると、近くで自動音声認識が実行され、テキストなどで単語などを表示する予定である。

こちらの事例は、実際に現場を訪れて通常通りの対応も行っているが、現場を訪れる前に現場の担当者とはオンラインで対話することで状況把握などをスムーズに行うことができた。また、現場を訪れた後もオンラインで対話すること、他の方からの意見などにより本学と該当施設の視点以外の視点を得ることができ、対象となる方にとってそのシステムがどのようなツールになるかが分かってきた。すなわち、このツールを本人が使うことで、来訪者とのスムーズなコミュニケーションを可能して社会との接点を広げることに寄与するのではないかという仮説もあることが判明した。

二つ目も知的障害の方に関する話題である。この方はこれまで両親と共に暮らしていたが、両親が高齢のために亡くなり一人暮らしをすることになった。しかし、近所の方から知的障害の方が一人暮らしをすることは心配、という通報があった。例えば、その方が食事の準備にはガス器具を用いるため、火器の扱いに不安を覚えるとのことでその施設が対応を求められたとのことである。この件について、2つの点で対応が可能ではあるが、実行に移すには慎重な議論が必要である。

一点目は、火器の取り扱い時に技術で側方支援を行うことである。これはカメラやセンサーなどを利用し、不適切な取り扱いがあった時に警告をするなどして対処することである。しかし実際には、話題の対象の方は両親と一緒に暮らしていた時からすでに両親の料理を手伝い、場合によっては両親の代わりに食事の準備を行っていた経験もあるとのこと判明した。このことから今回の事案については技術による側方支援を行う必要性はないものと考えた。

二点目は、通報した近所の方の不安を取り除くために技術を導入することである。これは例えば火器を取り扱う時にカメラなどを活用し、近所の方に見守りを願う、という案である。ただ、これを実行に移すには慎重な判断が必要となる。他人の家にカメラを入れるということについて、監視につながり違和感がある。近所の方の障害への理解は進むのかもしれないが、単純にカメラを入れることは本人の許諾も含めた慎重な判断が必要である。障害への理解という点である

なら他の方法を導入すべきではないかという意見もあった。

この事例は、参加者からの困りごととして相談された内容がきっかけで様々な意見へと展開して行った。特に障害当事者と日常的に関わる別の参加者より、プライバシー等の観点からカメラを導入することへの異議があり、議論へと発展した事例である。

三つ目は、数年前より手足に力が入らなくなる難病に罹患し、車椅子での生活を送るYさんの事例である。福祉系で役に立ちたいことから会に参加。Yさんから「デザイン系の学校で先生として働く予定だったが、病気になってしまい、その話がなくなってしまった」という話題から、オンラインで授業を行う可能性について議論がなされた。その学校で、Pepper（人型ロボット）を使うことも検討したが、実現には至らなかったとのこと。本学では、OriHime（遠隔コミュニケーションロボット）を使ったことがあるなど、情報共有した。Yさんは現在、県内高校で福祉分野の活動にオブザーバーとして参加していた。「今の病状を話すことで、何か役に立てることがあれば」との声を聞き、小林の知人で福祉系大学の先生（I教授）を紹介することになった。すぐに連絡を取り、10/2（金）にオンライン面会が実現。I教授は6年前に、あるマイナーな病気を難病指定してもらうための運動を起こし、指定に至ったことなど話された。難病の人には何とか力になりたいとも言っていた。Yさんの症状や生活パターンについて詳しく聞き取り、大学の授業等に招待してもらえる可能性を探っていただけたとのこと。また、現在の本業（ペンチャー）についても聞かれ、大学でのデザインなどを助けて欲しい旨、お話をいただいた。この事例は、オンラインでの会への参加が容易であったことに加え、オンラインでの打ち合わせや授業、仕事の形態が「想像可能な、自然な習慣」となりつつあったため、実現に至った事例であると考えられる。

四つ目は、県内の福祉施設Fの事例である。ここの利用者は、知的な障害を持つ人が多い。利用者は日常的に絵を書いたりしており、同じモチーフに特にこだわりを持つなど、特徴的な作品がたいへん多く生み出されている。施設の責任者は、これら「作品」を少しでも一般の人に知ってもらいたい、これを通じて、利用者のことを知ってもらいたい、さらには、少しでもお金に結びつくなら理想的、と話されていた。会の参加者の意見から、「このデザインで手拭いなどがあれば、欲しい」という具体的な声が聞かれたため、具体的な展開を小林が検討した。当該施設でもすでにいろいろな試みがあったが、本学卒業生の協力を得て、文房具など、これまでに行ったことのない商品展開を行うこととした。提案された企画の一部を図2に記す。今後、いくつかを実現する予定である。



図2 提案された企画の一つ（利用者の作品で作るステッカー）

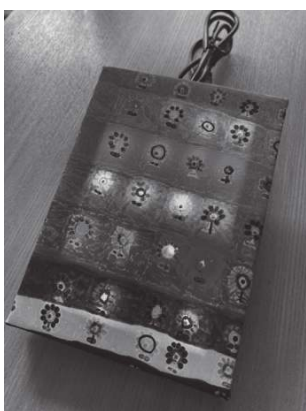


図3 利用者とのコラボ作品「イルミフレーム」

これについては、普段話している閉じたメンバーだけでない参加者からの意見を広く聞いたことから展開に至った。当該施設では、日常であり、同じ繰り返しであるが、オンラインでの集合を通じ、可能性を拾い上げるに至ったと考えられる。

五つ目は、先と同じ施設Fで多く制作されている作品を活用した事例である。これらの作品を使用し、小林が何か展開できることはないかと考えていた。理想としては、同施設内で継続的に展開できるような作業につなげられることが望ましい。施設では「簡単な電子回路なら作れそう」とのことであった。また「光るものが好き」という嗜好を耳にしていたため、次のような展開を試作した（図3参照）。キャンパスの生地印刷し木枠に張って、油絵のように仕上げた。「2cm四方くらいの小さな花」が、整列して描かれている。その花それぞれを、生地の裏側からLEDで光らせた。LEDはイルミネーションタイプのもので、時間の経過とともに自動で変色する。USB接続で動作するため、スマホなどと電源を共用できる上に、PCやモバイルバッテリーでの動作も可能である。作品を見て作者は「とろけるような笑顔を見せてくれた」とのこと。

今現在、利用者を含めた施設の方々と、大きなサイズの制作に挑戦していると聞いている。平時のフィールドワークを思い起こすと、問題などの共有や提案までは行いが、実行性は大変低いと感じていた。オンラインで毎回施設の人と顔を合わせると、「具体的に何かしてあげたい」という気持ちが持続される。小さなつながりであっても持続的であることがもたらした成果に思われる。

六つ目は、四つ目の商品開発と一部重なる内容であるが、同じく施設Fで制作されたイラストを湯澤がテキスタイルとして活用することができないか、という考えから現在アパレルや木工、特殊造形をはじめとした様々な分野で活躍する職人の力を借りてファッションやインテリアなどのプロダクト生産を行う予定である。近年では、全国各地にFab施設が点在し、個人レベルでの制作やプロトタイプを行いやすい環境ではあるが、大型造形や日常的に使用可能となるプロダクト品の量産までは困難である。今回は施設Fで扱う新しいプロダクト制作が主目的ではあるが、減少傾向にある国内の職人支援や技術継承という目的で湯澤が以前より職人在中型Fabの構想をしていたことから、このような試みが行われることになった。これらもオンラインでの集会で様々な意見を通じて構想につながった例である。

なお、こちらのテキスタイル案は、施設Fの作品展の一部としても利用できないかという案も浮上し、展示や立体造形物の展示、利用者の演奏やパフォーマンスを行うことを構想した。実施のために外部資金を得る準備をしていたが、次年度は施設予算を利用することになり実施に向けて準備を進める予定である。

5. 分析など

本学のオープンハウス後の7/31から1月末まで表1のように全23回実施してきた。それらの記録から分析したい。表中の列は左から、回数、日時、参加人数、話題提供かどうかの区分（話題提供のみ「話」と表記）そして、主な内容となっている。最右列は、会でどう影響したかを示した。

これまでに話し合われた議論の中でも、福祉施設における新たなオリジナルグッズを展開する話題と自閉症の方のパニックの原因を探る内容が、それぞれ10回ずつ取り上げられており、何度も話し合っていることがわかる。

オリジナルグッズについては以前より相談されることはあったが、新型コロナウイルス感染症の影響によりこれまで他の企業などより請け負ってきた仕事が減少したり、仕事がなくなったりしたため、自組織オリジナルグッズの創出を本格的に検討しているという話があった。施設の利用者の方は、これまで仕事に当てていた時間を自身の

表1 これまでの主な実施内容

#	日時	人数	区分	主な内容	内容に対する対応案など
1	7/31	8		職人在中型のFab施設の提案	
				障害理解に関する対応	アートやパフォーマンスの実践
				障害理解に関する対応	障害者のみの会社を立ち上げる
				障害理解に関する対応	VTuberの紹介
2	8/7	10	話	スーパーテニス	
				視覚的に判断できない障害について	
				障害者の公的書類申請に関わる問題	
				職人在中型のFab施設の提案	
3	8/14	6		表現活動のグッズ作成	Tシャツ作り
				障害者の公的書類申請に関わる問題（自筆の課題、代理申請の課題）	
4	8/21	7		大学などのグレーゾーン学生への対応	
				発話がはっきり伝わらない方への対応	
				自閉症の方などの発話を静かにする装置（吸音）	対象以外の方が耳栓する案
				自閉症の方のパニックの原因を探る	カメラ設置をして確認・施設内の音も含めて確認
5	8/28	8		施設利用者の自転車利用についての対応	
				施設に関わるボランティアも含めた方々の考え方	施設利用者の方を知ってもらうきっかけとしてのショップ運営
				発話がはっきり伝わらない方への対応	音声認識などを活用
				自閉症の方のパニックの原因を探る	
6	9/4	6		施設利用者は一般の方と比較して経験値が低い傾向にある	
				自閉症の方のパニックの原因を探る	カメラ設置へ
				instagramの活用（運用開始1週間）	
				表現活動への理解をしてもらうための工夫	
7	9/11	7		自閉症の方のパニックの原因を探る	
				instagramの活用	新型コロナウイルス感染症下で他人とつながることができる
				障害当事者の方の教育機関へつなげる	
				全盲音楽クリエイターの紹介	
8	9/18	5	話	和綿活用したい	
				instagramの活用	具体的なプロダクトへのアイデア
				instagramの活用	公開作品のオリジナルグッズなど（オンデマンドプリントや草木染めなどへの展開）
9	9/25	7		自閉症の方のパニックの原因を探る	
				福祉関係者同志をつなげて活動の充実化	
				施設からライブカメラで参加	
				オリジナルグッズのアイデア	オンラインショップの立ち上げなど
10	10/2	7		障害者の公的書類申請に関わる問題	
				障害者のYoutubeデビュー	
				和綿活用	
				オリジナルグッズのアイデア	
11	10/9	8	話	TASCぎふでの展示	
				オリジナルグッズのアイデア	
				自閉症の方のパニックの原因を探る	
				知的障害者の発話アシスト	
12	10/16	7		障害者のYoutubeデビュー	著作権などの権利関係が難しい
			話	TASCぎふでの展示より	
				障害者の公的書類申請に関わる問題	LINEBotの提案
				表現活動の取り組み	外部資金を獲得して表現活動などを実施する計画
13	10/23	5		オリジナルグッズのアイデア	
				自閉症の方のパニックの原因を探る	カメラが気になる
			話	岐阜県産業経済振興センターの紹介	
				オリジナルグッズのアイデア	mag?cubeの事例
14	10/30	4		オリジナルグッズのアイデア	テキスタイルなどの展示計画
				外部資金を獲得して表現活動などを実施する計画	
				自閉症の方のパニックの原因を探る	カメラが気になるため取り外し
			話	オンラインの生地印刷サイト	今後の活動の参考
15	11/6	5	話	SDGsを意識しリサイクル活動をしている組織	今後の活動の参考
			話	藍染などの活動	今後の活動の参考
				外部資金を獲得して表現活動などを実施する計画	
				自閉症の方のパニックの原因を探る	カメラを取り外して職員が観察
16	11/20	5		外部資金を獲得して表現活動などを実施する計画	テキスタイル+パフォーマンスの内容
				外部資金を獲得して表現活動などを実施する計画	外部資金申請は見送り。しかし一部は実行予定
				自閉症の方のパニックの原因を探る	

17	12/4	6		LINEBotの提案	
			話	福祉施設のふさと納税	
				オリジナルグッズのアイデア	工事の防水シートの提案
				障害者施設の新施設（食品加工施設が併設）	
				和綿プロジェクト	
18	12/11	5		福祉に関わる人の活動動機	
				LINEBotの提案	
19	12/18	6		LINEBotの提案	
			話	ヒーローズ・リーグ オンライン2020で新しいキーボード入力法の提案	
				障害者施設の新施設（食品加工施設が併設）	
				会話を求めている人への対応	LINEBot「AI りんな」の活用
20	12/25	6	話	岐阜県知事選	
				LINEBot「AI りんな」の活用	
				表現活動の取り組み	イルミフレームの提案（小林）
				障害当事者の方（自身の行動維持計画が難しい）	可視化できるといい
21	1/8	6	話	視覚障害者への声かけが足りない件（駅のプラットフォーム転落）	
			話	見守りシステム、通報システム	
				施設利用者の自転車利用についての対応	
				施設利用者の自宅におけるガスコロ利用への対応	
				施設利用者を主題とした漫画化	
22	1/15	3		施設利用者の達成内容より過程を見せることの意義	
23	1/22	4	話	九州大学ソーシャルアートラボ公開ディスカッション	
				この取り組みの振り返り	
				障害者施設の新施設（食品加工施設が併設）	
				イルミフレームの提案	
				知的障害者の発話アシスト	

能力開発にあてるなど各自の時間の使い方について工夫するなどの話題もあった。

一方の自閉症の方のパニックの原因を探るという内容は、新型コロナウイルス感染症とは無縁の内容ではあるが、一部の施設利用者がパニックになると施設内で暴れて他の方が怪我をするなどの影響があるため、その原因を探るために現場にカメラを入れてみる、という提案である。実際にはダミーのカメラを設置し、本人が慣れてから通常のカメラを入れるなど時間をかけて導入はしてみたものの、はっきりした原因までは追うことはできなかった。しかし、撮影された映像を後から時間をかけて見返すよりは職員ができるだけ該当者に寄り添い目視により原因究明をした方がいいのではないか、ということで職員の意識に変化をもたらした事例である。

これら二つの事例は、当初の頃から長く話し合われた内容である。特にオリジナルグッズは、単純に仕事を増やしてお金を得るためにどうしたらいいか、ということだけでなく、地域の方々が施設の利用者との関わりを持つための工夫や、そこにいる彼ら・彼女らについて知ってもらい、すなわち、障害について理解してもらうための取っ掛かりを盛り込もうと検討した。途中そのような取り組みの発展として、外部資金獲得のための動きもあったが、今回は申請するまでには至らなかった。しかし、次年度はそれらについて継続することとなり本学も積極的に関わることになっている。

これまで参加された方にアンケートを実施し、4名の方から回答を得たのでいくつか取り上げる。（全回答は表2に掲載）アンケートは以下の4項目による自由記述とした。

1. ワイド福祉の技術プロジェクト（仮）の開催を通じて良かったと思える点をお聞かせください。
2. 課題と思った点（今後に期待する点）についてお聞かせください。
3. あなたにとってどのような場所であったかお聞かせください。
4. その他、参加して感じたことなどあればお聞かせください。

1. の開催を通じて良かった点としては、多くの方が面識のない方との出会いであったり、意見の違いなど多くの気づきやアイデアをいただいたという回答が多く見受けられた。この会がいろいろな方をつなぐ機会として機能したことを裏付けていると思われる。また、中には現場では無理と思われることも、この会では前向きに話し合い、新たなアイデアなどに結びついたという意見などもいただいた。こうした点があると、継続的に参加していく目的に繋がるものと思われる。

2. 今後に期待する点については、この会の進め方を工夫したり参加者の関与の仕方を工夫したらどうかという意見もいただいた。これは場の設計でも述べたようなことを検討し、より効果的な会の進行となるように努めていきたい。一方で

表2 実施したアンケートの全回答

1. ワイド福祉の技術プロジェクト（仮）の開催を通じて良かったと思える点をお聞かせください。
面識のある方に加え面識のなかった方の参加もあって、それぞれの方が”今”感じている問題意識などを“生”の声で聞き質疑応答もできたので、視野が広がった。 協力体制のある人にYYY（施設名）の話を聞いてもらえることで、自分自身が課題を明確にしたり、その課題にはどんなサポートがあれば解決に向かうのか等をより具体的にできる機会になりました。 また、課題だけでなくこれからの展望や希望等も、現場の中だけでは「そんなの無理だろう」と深く考えることがない部分まで、幅を広げて話し合える機会を作ってくれたことで、現状からだけでは見えてこない様々な可能性を思い描く事が出来ました。 福祉関係者には見えてこない、視点やアイデアを出してき、技術提供や関係者に繋いで頂いてアート商品化が近づいています。 業態的に頻繁な訪問が困難な人や、普段接する機会がない人達の話・問題ごととしていることを定期的に聞くことができた。
現場で知られていない事を知ることができた
介助者としての意識と、介護施設における現場スタッフの思い、福祉に携わるエンジニアやデザイナーの思いが、思っていたよりもずれがあることがわかった。
2. 課題と思った点（今後に期待する点）についてお聞かせください。
継続的な議論をできたアイテムと、フリートーク形式で話題を広げることの両方ができてきた。具体的な展開に結びつけることを目指すのかどうか、今後の方向性を示す時期にあるかと。例えば、取り上げる話題をあらかじめ決めておけば、必要なメンバーが選択的に参加する、ということも可能になる。 他施設でも活かせる汎用性のあるアイデア等にして、全国で行われているこの様なプロジェクトと情報共有する仕組みがあると素晴らしいと思います。 また、色んな専門家を巻き込み、突き抜けた独創的なアイデアや仕組みを発見し、汎用性はなくとも強い刺激を与え、他施設の職員たちが新しい視点や衝動を手に入れ、新しい動きに出る切っ掛けを与えられたら、多様性のある面白い世の中になっていきそうです。 オンラインのデメリットでもあるが、議題に対して関与する人が主体となるために、関与しない人同士で並行して話をするというようなことができずに手持ち無沙汰？（終始無言）になる。zoomを使用していたのでブレイクアウトルームを使用して議題ごとに分かれるということをして、時間を区切って全体に共有するような仕組みになれば関与性は高まるのかもしれない（進行が重要）。 当事者に良かった点、悪かった点の共有 たまたま美術館のビデオを見て知ってくれた方が、自分の事業所で同じ事を実験したりする事もありました ステークホルダーを明確にした上で、小さなプロジェクトをスモールスタートさせたい。
3. あなたにとってどのような場所であったかお聞かせください。
コロナの話題が充満した部屋に、窓を開けて外の風を取り入れるような場所。 安心して希望や課題を語れ、そこから新しい芽が出て、可能性の膨らむ場所。 コロナ下において、情報交換手段としてはとてもよかった。特に移動時間・コストがかからない点はとても良い。 仕事に絡められるヒントを貰える場所 きっかけ作り 課題を共有し、適切な議論の場へ持っていくことができる場所
4. その他、参加して感じたことなどあればお聞かせください。
オンラインミーティングの移動時間不要で参加する敷居の低さのメリットが生かされていた。参加人数が大幅に増えた場合には、発言順番待ちなどのデメリットも増えるのかもしれない。 本当にありがたい機会です。 僕のように理想と現実のギャップを埋めたい方には、本当に助けになると思います。 問題を打ち明ける場であって、文句を言うネガティブな場所ではないので、混同してしまわないようにしなくてはいけないと思う。オープンハウスのようなゲストを呼んで、告知や配信などをするようなことは1〜2ヶ月間隔などで定期的に行うことで、参加者を増やすこともマンネリ化を防ぎ・活動を広めることにもつながるように思う。その中で、ブレイクアウトルームを使い分けるなど、チーム毎のディスカッションができる場があっても良いかと思う。 短期（1か月）、中期（1年）、長期（2年）位で出来る福祉用具を作れたらいいな XXX工場のスタッフの意見を聞けば、すぐには出来ませんが、とんでもない製品が将来出来るかも知れません 池田の施設も、有料ボランティアや、社協に登録してからじゃないといけないと思いますが、施設に入り込んで課題点を見つけることが出来るかもです エンジニア出身の方や、ダウン症の方は、意外に次のステップに進めるような気がします。 ・参加メンバーが固定されていた。 ・思ってたよりも、前に進んだ感じがなかった。 ・有意義な場所ではあった。

他の施設ともここでの内容を共有し、連携できるといいという意見もいただいた。これはオンラインの取り組みなら場所に関係なく参加できるため、今後の参加者を増やす方法も含め検討していきたい。

3. どのような場所であったかを問う質問に対する回答では、1と関係する内容ではあるが、ポジティブな意見が多数

を占めた。特にオンラインならではの参加についてのコスト削減が図れたという意見もあった。さらには、課題を共有して議論の場として機能できたというコメントもあり、こうしたことから繰り返し参加してもらえる要因になったと考えられる。

4. の参加して感じた点に関する回答では、オンラインで

の実施のため移動時間のコスト削減を図ることはできるが、人数や内容が今後増えた時に、シングルチャンネルのままでは時間が不足するのではないかと、という指摘や、いろいろなことが進展していないのではないかと、という意見ももらった。扱う内容が増えた場合など進行方法に工夫が必要だと思われる。

また、より多様な議論をするためには参加者を増やす必要があるのでは、きっかけとなったオープンハウスのようにゲストを呼ぶなど定期的に話題提供してはどうか、という意見も見受けられた。開催当初は多くの方に参加いただいたが、現在では参加人数も減少傾向にあることから、会での多様な考え方を引き出し続けるためにも、この意見を参考に参加者を増やすことを検討していきたい。

さらには中長期的なプロダクトを検討する組織として機能すると、より良いものができているのではないかと意見もいただいた。これは福祉で必要とされるプロダクトはそれぞれの事情により対応できることが重要なので、企画などの段階で多くの視点から漏れのないように議論することが必須となる。そのため、多くの視点（多くの参加者）から参加しやすい環境を維持するためにもオンラインで実施することの意義が改めて浮き彫りになったと考えられる。

6. まとめ

新型コロナウイルス感染症対策前のプロジェクトでは、具体的な内容を決めた後でも先方とメールなどを通じて、利用状況の把握や細かな調整を行ってきた。現場に提案内容を持ち込んで初めて、メールなどでは把握しきれなかった環境や施設での利用条件など、我々の想定との食い違いが判明することがあり、内容を大幅に変更するなど何回かの試行錯誤が必要な状況も生じていた。しかし、今回のようにメールなどの連絡に追加でオンラインでの対話をする中で、現場の把握がしやすくなった。何の変哲もない雑談から始まる対話から先方の考え方や方針なども分かり、我々の考えとの食い違いなども減らすことができていると感じている。

福祉分野の現場においては、オンラインツールの使用が限

定されていたり、対面可能な時間の制限や、外部者のカメラ撮影に制限がある等、数多くの許可の承諾を得る必要がある。また、その施設特有の制限も求められてきた。

しかし、今回の新型コロナウイルス感染症対策の影響により、現場でのオンライン利用も急速に普及してきている。それにより、現地職員自らによる映像の撮影や聞き取りなどが行われるためスムーズな共有が可能になり、従来では実施までに要した手続きを含む手間や時間を省略することができた。

加えて、現地訪問の際には人数の規制があるが、オンラインなら一度に多数の参加が可能のため、効率的な状況把握が可能となり、多くのアイディアに繋げられたと考えられる。さらに、継続して問題を扱うことで、相談事を持つ当事者が問題の本質に気づいて原因が他にあったという発見へ繋がるなど、問題に対処する姿勢の変化も感じ取ることができた。

一方で、複数の意見により、アイディアや話の進行が分散化される懸念もあるため、進行役の責任も重要である。また議論を前に確実に進めるためには、進行役以外に議論を記録し参加者と共有することも必要であり、実際に以前の記録を元に議論を進めたことも有効であった。しかし、参加者の中には複数のオンラインツールの使用が困難という人もいたために、より簡単に参加できるように検討する必要がある。

今後においても、オンラインの場作りを継続しながら、これまでの議論の中で取り上げられてきた問題に対して、対面で実施が困難な中においても一つずつ形にしていきたい。

新型コロナウイルス感染症対策によりオンライン化の手法を選択することになったが、利用してみると、オンラインでの長所・短所も見えてきた。特にこの取組みはオンラインだからこそ継続できた側面もあるので、今後もオンラインを活用してより良い環境となるようにしていきたい。

7. 謝辞

オンラインで積極的に意見交換をするなど、会に出席された全ての参加者に感謝します。

また、記録を取るなど進行を支えてくれたプロジェクト研究補助員の篠田幸雄氏に感謝します。